



昭和60年8月16日 道新ホールにて

## 懐かしい音

加藤けん三

子供達の原っぱには、さまざまな楽器が眠っていた。1人の子がタンポポの茎の、太めでしっかりしたのを選んで、吹き口を平らにして頬をふくらませて息を吹き込むと、それはプーと素朴な音で答えてくれた。他の子ども達も争って、思い思いの笛を作った。

ある子の笛は、甲高いピーという音で、別の子はバーという音で。ペーという音もあれば、ポーという音もあった。子ども達は賑やかにそれぞれの音を競いあった。タンポポの綿毛が、オーボエのような音と一緒に、高い空へ舞いあがっていった。また、小さな子は、大きな子の草苗がうらやましくてならなかった。草苗は子ども達の大好きな歌を唄うことができたので。

草苗にあき足らなくなった子どもは、工夫をこらした。笛の葉を唇に合わせて引き裂き上端を折り切った。それを下唇におしあてて上唇をしっかりと締めて吹くと、クラリネットの歌になった。ときには、工事場のまわりで、クルクルと丸まって風のまにまにころがっている鉦がらが、極上の笛になった。

これを管の形に巻きあげると、豆腐屋のラッパになった。この笛は、太くやわらかい音で、どこかの国のファゴットという楽器に似ていた。子ども達は皆、こんなさまざまな音が大好きであった。

やがて年月がたつて、子ども達は大人になった。子どもの頃の音の魅力が忘れられなかった者達は、それに似た西洋の楽器にとりつかれてしまった。そして生活に疲れた歳頃になっても楽器を手離さなかった。お盆の頃になると、昔の仲間達が、それぞれの愛用の楽器を持って集まって来た。皆で吹きならすその音色は、子どもの昔にかえったような素朴であたたかく、それぞれの心をゆさぶり、しみじみとその中にひたり込む喜びを味わった。ドボルザークは、そんな仲間達のために、こよなくふさわしい曲を作って行ってくれた。

### 西高オーケストラを育てる会

会長	小沢保知	(二中21期)
副会長	大塚夏生	(二中33期)
〃	平野 謹三	(前校長)
〃	富澤 中	(西高2期)
事務局長	渡部 睦子	(西高1期)
事務局	札幌市中央区北1条西4丁目	

東邦生命ビルクリニック内

☎(011)222-5040

### 札幌西高オーケストラOB会

会長	高橋研一	(西高12期)
事務局長	五十川 隆幸	(西高17期)
事務局	札幌市西区発寒5条8丁目	

クリーンパーハイツ105

☎(011)664-2856

※ただ今、名簿を作成中です。同期の方のご動静などがわかりましたら上記へご連絡下さい。

また、名簿ご希望の方も同様にご連絡下さい。